

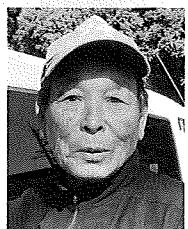
高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会

私のテーマ

世に見る“塚様”

お墓と私（上）

今久保 約雄



お墓との係わり

幼き日

日陰に入りて

墓碑を見ん

訪すぬは碑なり

物部川の河口より八km上流の右岸は、戦国時代に安芸氏・山田氏・長宗我部氏たちが争っていた荒蕪の平野であつた。

江戸時代の初期、山内家は宰相の野中兼山に命じて、新田開発を興し香長平野三千ヘクタールを拓いている。

中には、川石を重ね置いた無縁仏（塚様）が数多くあつた。その塚様の来歴は、乱世の頃に三氏が争つて討死した人たちの墓である。

歴史に目覚める

勇士ありてそ
現世の

英靈の

生家から一番近いのが南に僅か三十m、日常的に見ていたので無意識のうちにお墓に接していた。今でこそ、春秋彼岸の英靈墓参の慣習はなされてないものの、わたしの心には、今なを深く残っている。

面、右面へと、その出生、学歴、軍歴、終焉の地〇歳とある。そういった大きなお墓の日陰が、わたしの好きな場所であった。生家近くに戦死墓地は四基あって、その造りは全て同じであった。

で、家紋が光り、墓碑が建つていた。
正面は陸軍の階級、そして名前
を刻み、階級の右は勲○等、左は
功○級となつて、更に左面から裏

みには稲刈りの手伝いをしていた。水田にある塚様を、無意識のうちに見ていたし、小休止のときには、その隣にある共同墓地の日蔭にいた。

昭和四十年代初め、高知新聞夕刊に、土佐の「城址を訪ねて」という連載があつた。内容は、土佐の中世に小豪族や地頭たちが山城や出城、砦を築き自らの版図を守つた、その盛衰を順次紹介したものだつた。

連載は進み、岡豊城、岩村城楠目城、鳥ヶ森城と。岩村城はわたしの生まれた村の城だつたしのいずれもがごく近くの城址だつた。

たが、大人から「とても偉い神様だから、そこには行かれん」と注意があった。新聞の連載は、長宗我部元親のことにつれ、三男津野孫次郎親忠にまで及んで、その偉い神様が三男親忠だということが分り、大人の注意の意味が分った。野中兼山は、普請奉行として新田開発を推し進めた。その際、古いお墓は塚様として農地に残せば慈悲を持つた差配に心を打たれた

A black and white photograph showing a large tortoise resting in a field of tall, dry grass. The tortoise is positioned in the lower center of the frame, facing towards the left. Its head is slightly raised, and its front legs are visible. The background is a flat, open landscape with some low-lying vegetation and a small cluster of rocks or trees in the distance.

300～400年前から今に残る無縁仏の“塚様”(香美市土佐山田町戸板島) 2013/10/30

塚様や 農地以前の 地主なり 肥やせよ土地を ひもじてならぬ

次号へつづく

⑥話題人

刀剣研師

黒田 守寿

インタビュー

研ぎで完成する刀剣の美

若い世代に刀の魅力を伝えたい



研ぎ場に流れる音と空気

中素足ですよ。

これが作業場ですか。
獨特な空気がありますね。気持ちが引き締まるようです。研ぐときの音も、刀の重みなんか初めて耳にする重厚さを感じます。

そうですか。私は慣れているせいか、音はあまり気にしないですけどね。

研ぎが進むと音はなくなりますよ。仕上げの研ぎなどは、砥石を薄く細かくして和紙に貼つたもので、研ぎ跡を消していくような作業ですからね。

これは薩摩の幕末刀です。1本の刀で10日前後、1日7、8時間研ぐのが普通ですね。

思つた以上に根気のいる作業ですね。砥石の多さにもびっくりしました。冬でも素足なのですか。

日本刀は、刀工の鍛錬と研師の技術によって完成するといわれます。『鍛える』ことと『研ぐ』ことで刀の姿が決まるわけです。砥石も作業の過程で、荒いものから細かい目のものへと変わっていきますからね。

刀は純鉄という全く不純物のない鐵からできています。そのため刃作りは鉄を何度も折り返し、という作業をして『鍛え』るわけです。そうすることで、鉄は純金のようにやわらかくなり、輝きが出るのです。鉄の人も熱ますからね。

い、若いうちに鍛えなきゃね(笑)。そんな鉄の性質を分かつたうえで研いでいきます。もちろん、年

日 本刀の世界は深い。武士にとって刀は魂である。

黒田守寿さんは、刀剣研師では四人しかいない人間国宝(重要無形文化財保持者)の一人・小野光敬氏の下で10年間修行し、以来50年近く刀剣を研いでこられた職人。厳しい目を持つ刀剣専門家や愛好家の間で、信頼が厚い人である。

正月紙面は、伝統的な世界で生きる黒田さんの話で飾りたいと、福岡市博多区のご自宅兼作業場を訪ねた。

作業場(細工場)の中のハ置ほどの板の間に刀を研ぐ黒田さんは、応接間でお話を伺うときとは一味違った存在感が漂っていた。

刀は研がれて生き続ける
1時間ほど作業場を拝見し、研ぎということを実際のものとしてどう改めてお話を伺いたいと思います。率直な質問ですが、研ぐってどういったことがあります。

とですか?

刀は放つて置くと鎌が生じて腐食します。腐ると刀は形を失っていくわけですね。ボロボロに壊れていくわけです。しかし、研いで手入れをして光らせることも重要です。これが研師の腕を試されるところであります。

研ぐということはまず鎌をとることです。次に、時代や形に合わせて、刀の特長を出すように光らせる。いや、その特長以上に良くして光らせることも重要です。こ

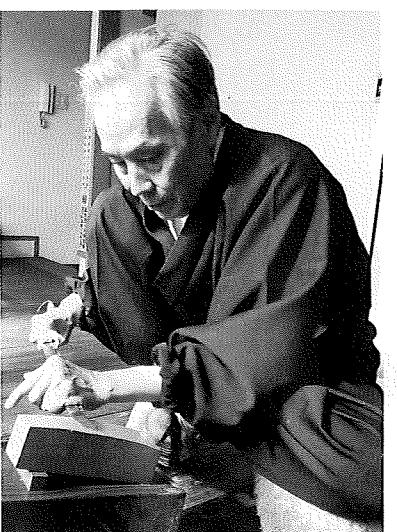
あつても、美術品としての価値を持つことができます。

刀は放つて置くと鎌が生じて腐食します。腐ると刀は形を失っていくわけですね。ボロボロに壊れていくわけです。しかし、研いで手入れをして光らせることも重要です。これが研師の腕を試されるところであります。

刀鍛治の技術が確立した鎌倉時代後期から南北朝時代の刀は見事ですね。そういう古い刀を研ぐときは、時代や当時の形に忠実に研ぎます。

しかし、現代刀のような新しい刀は、研ぐことによってその形を完成させるという役割もあります。

黒田さんは十代で研師の世界に入られたということですが、



長い歳月の間に得たものはたくさんありますね。

ありでしようね。

本当の研ぎができるまでには10年かかります。私も師の小野光敬先生の下で厳しく苦しい修行を重ねたおかげで、今があります。

人間国宝になるには国宝や重要な各先生も同様です。現在、国宝級の刀剣はほとんど研がれていますので、研ぐ機会は少ないのでしょうね。

幸いなことに私は修行時代に、先生の下で国宝を研ぎました。これは大事なことです。

あるとき光敬先生の所に、三島由紀夫が割腹したときに介錯した刀が持ち込まれました。鑑定依頼には、いいもの、本物を見ないといけない。

国宝や重要文化財など上質なものを探ることで、刀の良し悪しがわかる。自分の人生と、刀剣のよ

うか。

いいお話をですね。黒田さんから最後にひとことお願いします。

黒田邸を出ると、来たときの雨は上がりでございました。ふと、黒田さんが長い歳月研いでこられたのは、刀剣だけでなく、ご自身自身の人生と、刀剣のよ

うな恵美さんの美しさではないかと思った。雨上がりの空が眩しかった。

です。私は横で見ただけですが、印象的でしたね。私もかく研ぎ終わって依頼主にお渡しし、喜んでいたいたときお渡しですね。また、宇佐神宮は嬉しいですね。一般の方の仕事をしたときなどが入れないような所まで行くことができたことも思い出されます。

確かに研ぐという作業は厳しい

ことです。私のままを蘇らせることが求められます。そのためにも基本的な知識はむろん、姿、金筋、地形、地鉄、刀紋などを知り、鑑定眼を鍛えなくてはならない。

刀に負けてはいけない。刀工が命がけで作った刀ですから、刀に負けないように研がなくてはなりません。刀は完璧を求めます。つまり、研ぎは刀が作られた時代や形に忠実に、本来のままを蘇らせる

ことです。

刀に負けてはいけない。刀工が命がけで作った刀ですから、刀に負けないように研がなくてはならない。刀は完璧を求めます。つまり、研ぎは刀が作られた時代や形に忠実に、本来のままを蘇らせる

ことです。そのうえで、自然に研ぐ。研ぎ終わりのタイミングを決める。自分で刀の性質をつかんで、刀への自信や礼儀をもつて研ぐ。つまり、いい加減な仕事はしないということですね。

刀は純鉄という全く不純物のない鐵からできています。そのため刃作りは鉄を何度も折り返し、という作業をして『鍛え』るわけですね。そうすることで、刀は純金のようにやわらかくなり、輝きが出るのです。刀の人も熱ますからね。

刀は純鉄といつも純物のない鐵からできています。そのため刃作りは鉄を何度も折り返し、という作業をして『鍛え』るわけですね。そうすることで、刀は純金のようにやわらかくなり、輝きが出るのです。刀の人も熱ますからね。

刀は純鉄といつも純物のない鐵からできています。そのため刃作りは鉄を何度も折り返し、という作業をして『鍛え』るわけですね。そうすることで、刀は純金のようにやわらかくなり、輝きが出るのです。刀の人も熱ますからね。

刀剣から時代への思いを馳せる

刀は武器としてあるだけでなく、日本人の魂、素晴らしい文化だと思います。これだけ見事な美術品は世界中にはないのではないか。

一途に地道に研ぎ職人として精

婚するまで私は刀剣や研ぎなんてことは知りませんでした。素人の私でも長年主人の仕事を見ていて、うち、日本刀の魅力を一人でも多くの方にお伝えしたいと思うようになりました。

刀は武器としてあるだけでなく、日本人の魂、素晴らしい文化だと思います。これだけ見事な美術品は世界中にはないのではないか。

弘の刀紋をめざしていま

進する主人の姿からもそれを感じます。また、この博多という土地に次代に伝えていくほしいと思います。刀剣の魅力は、長い日本の歴史の、それそれの時代に思いを飛せることができるというこ

とですから……。

私も同感ですね。若い爱好者が増えて、刀を買って、知つて、大事に次代に伝えていくほしいと思います。刀剣の魅力は、長い日本刀の人生と、刀剣のよ

うな恵美さんの美しさではないかと思った。雨上がりの空が眩しかった。

黒田邸を出ると、来たときの雨は上がりでございました。ふと、黒田さんが長い歳月研いでこられたのは、刀剣だけでなく、ご自身自身の人生と、刀剣のよ

うな恵美さんの美しさではないかと思った。雨上がりの空が眩しかった。

幸いなことに私は修行時代に、先生の下で国宝を研ぎました。本阿弥日洲、永山光幹、藤代松雄という人間国宝であります。

あるとき光敬先生の所に、三島由紀夫が割腹したときに介錯した刀が持ち込まれました。鑑定依頼には、いいもの、本物を見ないといけない。

国宝や重要文化財など上質なものを探ることで、刀の良し悪しがわかる。自分の人生と、刀剣のよ

うか。

いいお話をですね。黒田さんから最後にひとことお願いします。

黒田邸を出ると、来たときの雨は上がりでございました。ふと、黒田さんが長い歳月研いでこられたのは、刀剣だけでなく、ご自身自身の人生と、刀剣のよ

うな恵美さんの美しさではないかと思った。雨上がりの空が眩しかった。

黒田邸を出ると、来たときの雨は上がりでございました。ふと、黒田さんが長い歳月研いでこられたのは、刀剣だけでなく、ご自身自身の人生と、刀剣のよ

うな恵美さんの美しさではないかと思った。雨上がりの空が眩しかった。

幸いなことに私は修行時代に、先生の下で国宝を研ぎました。本阿弥日洲、永山光幹、藤代松雄という人間国宝であります。

あるとき光敬先生の所に、三島由紀夫が割腹したときに介錯した刀が持ち込まれました。鑑定依頼には、いいもの、本物を見ないといけない。

国宝や重要文化財など上質なものを探ることで、刀の良し悪しがわかる。自分の人生と、刀剣のよ

うか。

いいお話をですね。黒田さんから最後にひとことお願いします。

黒田邸を出ると、来たときの雨は上がりでございました。ふと、黒田さんが長い歳月研いでこられたのは、刀剣だけでなく、ご自身自身の人生と、刀剣のよ

うな恵美さんの美しさではないかと思った。雨上がりの空が眩しかった。

黒田邸を出ると、来たときの雨は上がりでございました。ふと、黒田さんが長い歳月研いでこられたのは、刀剣だけでなく、ご自身自身の人生と、刀剣のよ

うな恵美さんの美しさではないかと思った。雨上がりの空が眩しかった。

幸いなことに私は修行時代に、先生の下で国宝を研ぎました。本阿弥日洲、永山光幹、藤代松雄という人間国宝であります。

あるとき光敬先生の所に、三島由紀夫が割腹したときに介錯した刀が持ち込まれました。鑑定依頼には、いいもの、本物を見ないといけない。

国宝や重要文化財など上質なものを探ることで、刀の良し悪しがわかる。自分の人生と、刀剣のよ

うか。

いいお話をですね。黒田さんから最後にひとことお願いします。

黒田邸を出ると、来たときの雨は上がりでございました。ふと、黒田さんが長い歳月研いでこられたのは、刀剣だけでなく、ご自身自身の人生と、刀剣のよ

うな恵美さんの美しさではないかと思った。雨上がりの空が眩しかった。

黒田邸を出ると、来たときの雨は上がりでございました。ふと、黒田さんが長い歳月研いでこられたのは、刀剣だけでなく、ご自身自身の人生と、刀剣のよ

うな恵美さんの美しさではないかと思った。雨上がりの空が眩しかった。

幸いなことに私は修行時代に、先生の下で国宝を研ぎました。本阿弥日洲、永山光幹、藤代松雄という人間国宝であります。

あるとき光敬先生の所に、三島由紀夫が割腹したときに介錯した刀が持ち込まれました。鑑定依頼には、いいもの、本物を見ないといけない。

国宝や重要文化財など上質なものを探ることで、刀の良し悪しがわかる。自分の人生と、刀剣のよ

うか。

いいお話をですね。黒田さんから最後にひとことお願いします。

黒田邸を出ると、来たときの雨は上がりでございました。ふと、黒田さんが長い歳月研いでこられたのは、刀剣だけでなく、ご自身自身の人生と、刀剣のよ

うな恵美さんの美しさではないかと思った。雨上がりの空が眩しかった。

黒田邸を出ると、来たときの雨は上がりでございました。ふと、黒田さんが長い歳月研いでこられたのは、刀剣だけでなく、ご自身自身の人生と、刀剣のよ

うな恵美さんの美しさではないかと思った。雨上がりの空が眩しかった。

幸いなことに私は修行時代に、先生の下で国宝を研ぎました。本阿弥日洲、永山光幹、藤代松雄という人間国宝であります。

あるとき光敬先生の所に、三島由紀夫が割腹したときに介錯した刀が持ち込まれました。鑑定依頼には、いいもの、本物を見ないといけない。

国宝や重要文化財など上質なものを探ることで、刀の良し悪しがわかる。自分の人生と、刀剣のよ

うか。

いいお話をですね。黒田さんから最後にひとことお願いします。

黒田邸を出ると、来たときの雨は上がりでございました。ふと、黒田さんが長い歳月研いでこられたのは、刀剣だけでなく、ご自身自身の人生と、刀剣のよ

うな恵美さんの美しさではないかと思った。雨上がりの空が眩しかった。

黒田邸を出ると、来たときの雨は上がりでございました。ふと、黒田さんが長い歳月研いでこられたのは、刀剣だけでなく、ご自身自身の人生と、刀剣のよ

うな恵美さんの美しさではないかと思った。雨上がりの空が眩しかった。

幸いなことに私は修行時代に、先生の下で国宝を研ぎました。本阿弥日洲、永山光幹、藤代松雄という人間国宝であります。

あるとき光敬先生の所に、三島由紀夫が割腹したときに介錯した刀が持ち込まれました。鑑定依頼には、いいもの、本物を見ないといけない。

国宝や重要文化財など上質なものを探ることで、刀の良し悪しがわかる。自分の人生と、刀剣のよ

うか。

いいお話をですね。黒田さんから最後にひとことお願いします。

黒田邸を出ると、来たときの雨は上がりでございました。ふと、黒田さんが長い歳月研いでこられたのは、刀剣だけでなく、ご自身自身の人生と、刀剣のよ

うな恵美さんの美しさではないかと思った。雨上がりの空が眩しかった。

黒田邸を出ると、来たときの雨は上がりでございました。ふと、黒田さんが長い歳月研いでこられたのは、刀剣だけでなく、ご自身自身の人生と、刀剣のよ

うな恵美さんの美しさではないかと思った。雨上がりの空が眩しかった。

雨乞いの名歌

京都国立博物館

宮川 椎

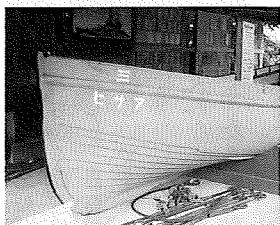
一

「かの小野小町が名歌よみても、よくひでりの順のよき時ハうけあい、雨が降り申さず。あれハ北の山がくもりてきた所を、内々よくしりてよみたりし也」

という文章は坂本龍馬が禁門の変を前にした緊迫感を背景に「時勢を良く見て、その時期の満ちるのを待て（今はまだ倒幕挙兵には早い）」と言いう意味で書いた手紙の冒頭部分である（元治元年六月二十八日付、乙女あて。土佐山内家宝物資料館蔵）。とても重要な手紙だ。小野小町が詠んだ雨乞いの名歌とは「千早振る神もみまさば立驕ぎ天の戸川の樋口開けたまへ」というものだ。確かに効きそうな和歌である。

この龍馬の手紙とよく似た話があるので記して置きたい。

大分県南部、竹田市街の高台にある広瀬神社は日露戦争の際に旅順港で戦死して軍神となつた広瀬武夫を祀る社である（昭和十年創建）。昭和四十年頃にこの広瀬神社の二代目の宮司をつとめたのは広瀬末人という人であった。彼は武夫の身内である。正確には広瀬武夫の兄勝比古のひとり娘である馨子の婿（龍馬のひにとえるならば兄権平の娘）である。



戦艦朝日のカッターボート
(広瀬神社境内の広瀬武夫記念館下に展示中)

廣瀬宮司の雨乞いの祈祷はまさに小野小町の和歌だったのだ。また歴史の動きと天気の変化はよく似ているということかも知れない。

竹田での彼の評判は「広瀬神社の宮司さんの雨乞いのご祈祷はとても良く効く」とい

うものであつた。しかしながらその実態は、ご想像のとおり、海軍時代に洋上の艦船の上での風と雲の動きから天気の変化を予知予報する能力が鍛えられ、山国竹田でも風向き雲行きを読んで、雨が降りそ

うなタイミングが分かつたうえで雨乞いの祝詞をあげた（なのですが雨が降る）といふことだつたのである（高城知子著『広瀬家人びとより』）。

あつた。海軍中将であつた広瀬末人氏は晩年にゆかりの竹田で広瀬神社の宮司となつたのだ。

コラム・龍馬のこと

「永国淳哉サンをしのんで」

現代龍馬学会長 片岡 雅文

県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会の初代会長で、その後も顧問を務めてくださっていた永国淳哉先生が昨年9月21日、73歳で急逝されました。

2009年に発足して5年になる現代龍馬学会は、先生が会長を引き受けさせてくれたからこそスタートできたのであり、今まで歩んでこられたのも、先生が顧問としてずっと見守り、支えてくださっていたからです。引きつづいて、これからも指導していってくださいのはずが、あまりにも急にこのようなことになってしまい、私どもには言葉がありません。なにより、先生ご自身、無念でいらっしゃることでしょう。

学会の発足にあに置いておられたこおける新しい龍馬像でした。そのことにいろいろなイメージうです。2009年に開研究発表会で、龍馬と和歌をめぐって興味深い所感を述べられたのも、その一環だったかと思われます。

いま振り返ってみると、先生の土佐史研究の強みは、長年積み重ねてこられた英語力にありました。ジョン万次郎を現代によみがえらせた『ジョン万エンケレセ』や『雄飛の海』、あるいは馬場辰猪の悲劇を浮き彫りにした『遠い波濤』など、アメリカやイギリスへも足を伸ばし、入念に取材して書き上げられた著作は、先生独自のもので、他の研究家の追随を許しません。

龍馬についても、英語や欧米文化とのかかわりのなかで、これまでになかった人間像を構想しておられたに違いありません。かえすがえすも残念なことです。

あらためて、心からご冥福をお祈り申し上げます。



故永国淳哉氏

“話してみるかよ”

「募金活動をやろう！」

現代龍馬学会員 江上 英治

12月7日、今年最後の現代龍馬学会の理事会に出席した。集まりの焦点は来年の課題である。先に県が発表した坂本龍馬記念館のリニューアル基本構想検討委員会の立ち上げが話題の中心となった。築20年を越えた建物は、海に乗り出す外観は入館者にとって最高の評価を受けていますが、一方、潮風、太陽の強さは博物館泣かせという。おまけに「記念館はながされる！」。館長の言葉に驚いた。なんでも龍馬記念館の立っている位置がよくないらしい。岩盤に挟まれた埋立地だから、マグニチュード8.2クラスの地震がきたら、海に向かって流れていくというわけだ。

大変である。人もそして貴重な資料類も。

検討委員会の論議はここからがスタート、やや遅きに失した感は否めないが“龍馬の土佐”からすればこれは高知県にとって最優先の課題だと思う。収蔵庫は岩盤の上に移さなければなるまい。となると、展示室も。必然的に“別館構想”が浮かんでくる。現在の龍馬館は、その立地条件からすればパフォーマンス館として残すといい。夢はいくらでも膨らんでいく。

そう、課題をクリアしていくには多大な予算と時間が必要。しかし、記念館のもともとの生い立ちを思い出してほしい。商工会議所の青年部の募金活動から出来上がったものではないか。「募金活動をやろう！」。今回もそんな声が聞えていいような気がするのだが。“龍馬さんの笑顔”が見えるぜよ。